祖師堂

正面に祖師堂がある

祖師堂/江戸時代中期/重要文化財

重要文化財

法華経寺祖師堂

昭和六十年五月十八日指定

構造形式　桁行七間、梁間七間、一重、比翼入母屋造、正面向拝三間、
背面向拝一間、こけら葺　附棟札　十一枚

祖師堂は宗祖日蓮聖人をお祀りするお堂で、最初は鎌倉時代の正中二年（一三二五）に上棟した小規模な五間堂でした。その後、焼失などのため数回の再建があり、現在の祖師堂は江戸時代中期の延宝六年（一六七八）に上棟されたものです。

建物は大規模な七間堂で、屋根を二つ並べたような比翼入母屋造の形式を持つのが特徴です。このお堂の他に比翼入母屋造の屋根を持つのは全国でも岡山県にある吉備津神社本殿（国宝）だけです。堂内は、正面の吹き放し外陣、内部の広い内陣、それに両脇の脇陣と背面の後陣に区切られています。内外陣境の上部には揚格子、下方には結界と呼ばれる取り外し可能な仕切りを入れ、また内脇陣境にも同様な結界がありますが、大きな行事の際には、これらを開け放って堂内を広く使うことができるように工夫されています。これらは日蓮宗の仏堂によく見られる特有の形式です。内陣は本来板敷きですが、現在は畳を敷詰めてあります。天井は格縁天井といい、碁盤目状の縁の部分は黒漆塗りで、天井板には桔梗紋が描かれているほか、内陣周りの上部は極彩色塗りで荘厳にされています。

祖師堂は関東地方では数少ない大型日蓮宗仏堂の典型で、その規模や形式は当時の庶民信仰の動向を知る上での一指標として位置付けられるとともに、建立年代が明確な建造物としても重要です。

昭和六十二年から始まった解体修理は十年の歳月を費やして平成九年に完了し、建立当初の姿に復原されました。

平成十一年三月

市川市教育委員会

参考

改修前の祖師堂

大本山　法華経寺　重要文化財　祖師堂

以前は三層錣屋根入母屋形式であったが、現在は建造時の
形状とされる比翼入母屋造に復元されている（柿葺き）
比翼入母屋造は吉備津神社本殿（国宝）と同じです。

インターネットより

建物の大きさから、一つの屋根で覆うとすればこんな形も一つの
選択肢であったのかもしれない
現在の形は屋根の高さを高くしないで済む方法であったのだろう
(ただし、両翼の谷間の雨水対策が悩ましいのでは)

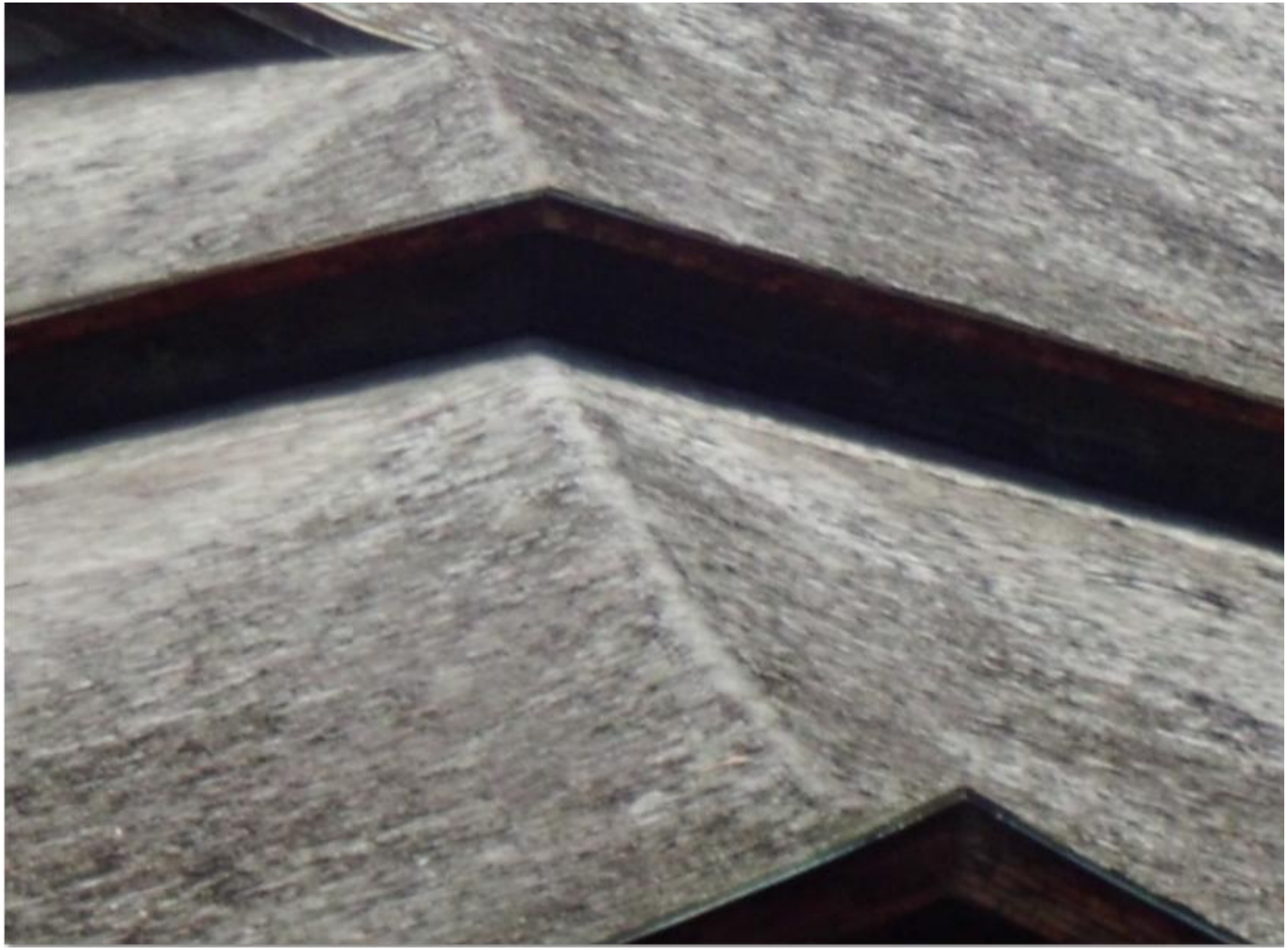
吉備津神社本殿(国宝)

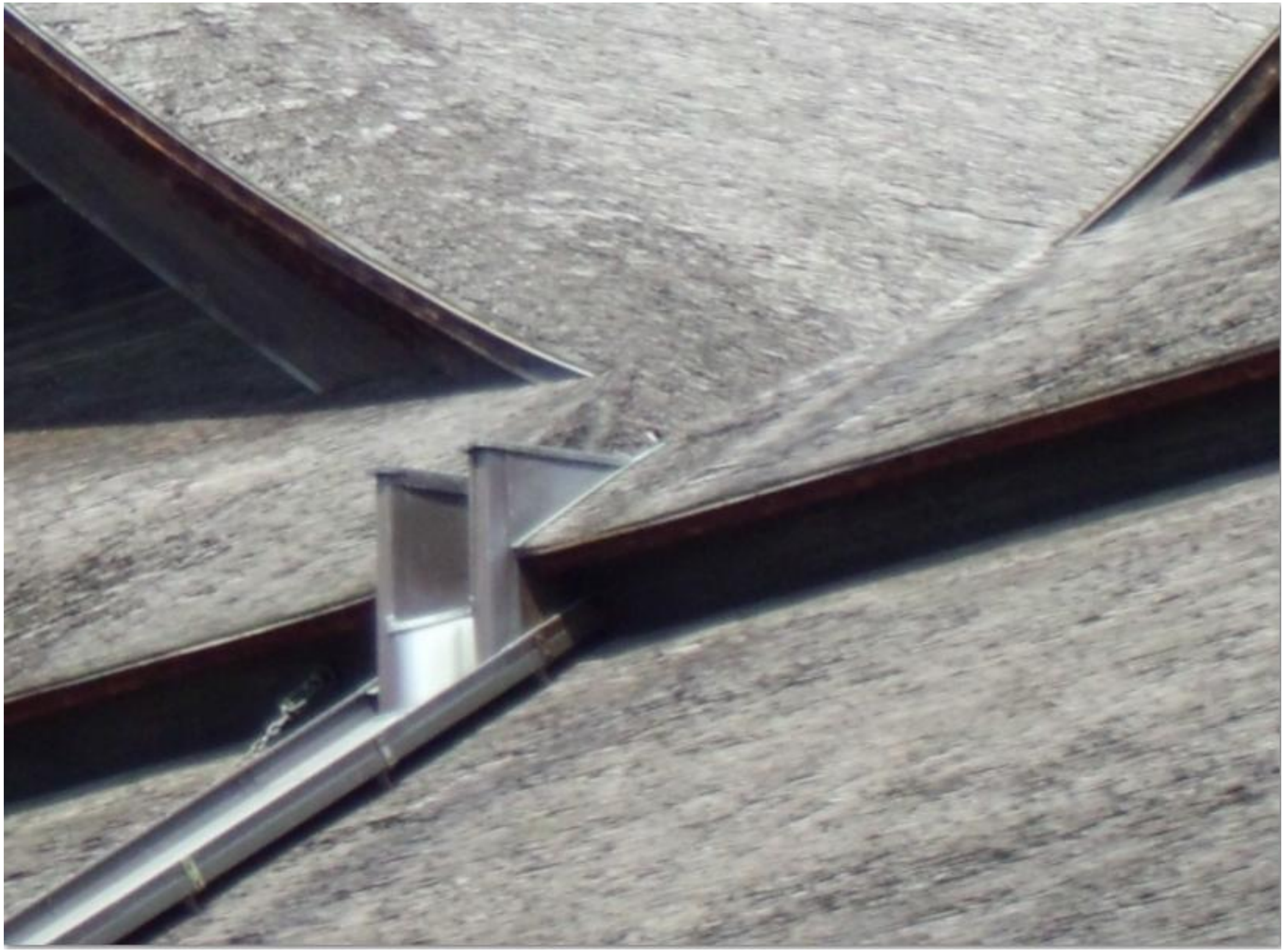
インターネットより

現在の形に似た事例/閑谷学校の講堂（国宝）

インターネットより

宗祖立教開宗七百五十周年記念





参考

― 勾配ではなく、屋根の形状はどういう要因が影響しますか。

例外もありますが、定説として言われているのが、寄せ棟は竪穴式住居系、切り妻は高床式住居系という分類です。竪穴住居の屋根は、周りから枝などを取り囲むように立て掛けたので寄せ棟風になりました。多少煙出しの穴を開けたりして入母屋的にも見えますが、基本的には寄せ棟です。こうして日本の土着の形式として寄せ棟屋根が出発し、入母屋にも発展していきました。ここに入母屋民家の骨組み写真があります。入母屋の民家　垂木の並び方がよくわかる。『物語／ものの建築史-屋根のはなし』(鹿島出版会1990)よりいかにも四方から集め寄せ掛けた形になっていて、竪穴式住居がまわりから木を差し掛け、屋根を組んでいた名残りであろうといわれているわけです。

入母屋の民家　垂木の並び方がよくわかる。『物語／ものの建築史・屋根のはなし』(鹿島出版会1990) より

これらの民家とは別系統で、神社仏閣建築があります。見た目は同じ入母屋でも寺院建築の場合、寄せ棟から変化した民家における入母屋とは、構造も違うものです。寺院建築は、中国からいわば先端技術として伝わってきました。そこでは、入母屋、寄せ棟、切り妻がセットで導入されますが、入母屋は2階建ての大規模な建物に用いられ、寄せ棟は平屋、そして切り妻は付属的な施設のものでした。つまり、入母屋がもっとも格が高かったわけです。寺院建築の入母屋屋根の発生は、おそらく切妻屋根の妻側に庇を伸ばしたものです。ここで庇というのは軒を覆うだけの短いものではなく、建物の構成要素として重要なものでした。古代から鎌倉時代までは、いったん「身舎(もや)」と呼ばれる中心構造体を建て、もっと広くする必要があるときに庇を延ばしていました。京都御所の紫宸殿を見ますと、屋根の面に段差がついています。この段差が最初の構造体の庇から新たに延ばした庇に切り替わる境界なのです。もちろん、今の御所の紫宸殿は、最初から一体で造られていますが、発展の過程を示しているわけです。

ですから、大陸からの技術が使えるような支配者階級が切妻、入母屋系の屋根で、寝殿造りは、入母屋になります。

（インターネットより借用）

参考ホームページ

http://www.mizu.gr.jp/kikanshi/mizu_17/no17_e02.html

京都御所の紫宸殿

（インターネットより借用）

- 入母屋は切妻から派生したものと寄棟から発展したものの2系統がありますが、日本建築の場合、切妻であった寺院建築の身舎(もや)の四面に庇がつき、それが母屋の屋根と一体になって入母屋が形成された例がこの京都御所の紫宸殿に見られます。
  屋根をよく見ると、屋根の先端に近いところに一段の差があります。ここが身舎と庇の境目で、構造自身もここから外側が身舎にひっついたかたちになっています。
  つまり、屋根の妻側の三角の部分が本来の建物で、その周囲に庇がくっついたかたちになっています。屋根はそれらを大きく覆って全体の領域を限定していることになります。
- つまりこの系統の入母屋の形態は、建物の内部に身舎に対して庇の空間が出現したことにより成立しましたが、この庇の空間は、伝統的な日本の貴族住宅に独自の空間をもたらすことになりました。外部により近い内部を生み出して身舎をより内部にし、身舎と外部の間に2重の境界をつくり出したのです。
  （もうひとつの系統は、民家の寄棟住居の屋根の端部に囲炉裏の煙出しの開口が設けられ、一体となって入母屋の形態がつくられたものです。）

増田建築研究所のホームページより

参考ホームページ

http://web.kyoto-inet.or.jp/org/orion/jap/hstj/kamigyo/gosho.html

上記の各見解を要約すると

入母屋屋根が出来上がっていく過程には二つあって

竪穴式住居の屋根としてオーソドックスであった「寄棟屋根」が屋根の端部に煙出しの開口が必要となることによって
「入母屋屋根」へと発展した民家の系統

高床式の「切妻屋根」が機能上必要になって妻側に庇を伸ばしたことから発展した神社仏閣の系統

ということのようです。

ここで後者の「妻側に庇を伸ばす」ということになると、その庇は平側にも廻り込んで所謂「錣葺き屋根」にも通じます。その意味では

錣葺き屋根は入母屋屋根への過渡期的な様相を帯びているとも思われますが、錣葺きの屋根はその後も消滅することなく一つの

デザイン（形式）としてニーズを持ち続けてきたのではないでしょうか。

ただ入母屋屋根が錣葺き屋根を席巻していく理由には、錣葺き屋根はその納まりからか漏水のトラブルのリスクが高かったとも

考えられます。（また、仕事も面倒くさいということも）

このように捉えるとこの法華経寺祖師堂や京都御所紫宸殿、はたまた手児奈聖堂の屋根も入母屋屋根の一形式と言っても間違いでは

無いとも言えます。

なお、屋根を上下に分けて葺くということで錣葺きとしてしまえば、上記のいずれも立派な錣葺き屋根と言っても過言ではないでしょう。

宗祖立教開宗七百五十周年記念

床下

大勧進平成大仏修理浄財受付

大勧進平成大仏修理浄財受付

大祖師堂

祖師堂

星乃井

星乃井

こんなものもあった

大勧進